

## エッセイ 「同期会」

根来 澪子

万物が活力に満ちて芽をふく春！ 桜がさき、チューリップがさき、そしてつつじが……。やがて自然は新緑にあふれ、「猫はネズミを捕るのを忘れ、人間は借金のあることを忘れる」と漱石がいみじくも表現した春がやってきた。私の誕生日は4月だ。誕生日はダイヤモンド。宝石とは全く縁のない人生だったが、この豊穡にみちた季節に生をうけたことがうれしい。

仕事をもって忙しい娘と、大学2年生の男の子と、社会人になってデザイナーとして張り切っている女の子の孫たちが、雑踏をはなれた郊外にある私の御巣肩のフレンチレストランでフルコースを御馳走してくれるのは例年通りだが、今年は誕生日に靴をプレゼントしてくれるという。平衡感覚がにぶってしまい、いつもスニーカーを愛用しているのだが、久々に学生時代の同期会がTホテルで行われるので、そのために新調したいと以前から言っていた。

「御馳走してくれるだけでいいのよ。それだけで十分よ」私はニンマリしていつてみる。「ぜひプレゼント

させて、もうあと何年できるかわからないから、出来るうちにと思っているのよ。」娘はさりげなく言った。孫がその言葉に続けた。「お誕生日のお食事だってあと何回できるかしらね」。

えーあと何年ですって？それって私の寿命のこと？続けて言いうべき言葉を失った。あと何年桜をみられるかとは重病の患者が思うことである。私は病人ではない。しかし、もう年齢に余裕はなく、これからの終活を考える時期になっているようだ。余命のカウントダウンが始まっているのだ。

「毎日が過ぎていくのがとても速いのよ」とつぶやく。「おばあちゃん、やばい年になっちゃったね」孫がとどめの一言をさす。本人が自覚しなくても私の動作の鈍さ、認知と疑われるほどの忘れっぽさなど、周りもしっかり観察しているのだ。

「長生きしてね」とアメリカの孫たちからの誕生日カードに念押しをしてくる。わざわざ強調してくれなくても、とこれまた考え込んでしまう。しかし周りを見回しても私より年長の身内はほとんど鬼籍にはいった。

摂理に従えば、ところてん式に私に順番が回ってくる。複雑な心境の4月であった。

Tホテルは日比谷の一角にあつて伝統と格式と威容を誇っている。照明をおとしたロビーはヨーロッパ様式であるうか。しかしお客が大勢集まる場所なのだからムードよりもお互いの顔が判別しやすい明るさが必要だと思う。目が老化している老人は多いはずだ。

薔薇咲き乱れ、緑濃き5月、学生時代の同期会に出席するために神奈川の西のはずれから、わざわざ都心のTホテルに向いた。もちろん娘がプレゼントしてくれた新調のエナメルのパンプスをはいて。服装もこの際買いそろえようとはりきったのだが、「どんな服を着ているかなんて、誰もママのこといちいち気にしていないいわよ」という娘の助言に納得して、ありあわせの茶系のスーツにした。せめて董色のワンピースなど欲しかったのだが、これもまた、これから何度着る機会があるかわからないので無駄というべきだろう。

大学卒業後60年目にあたる今回の同期会は、80歳を過ぎた今、人生最後の行事になるだろうというこゝとで、ぜひ出席してほしいと幹事から連絡があつた。同じ学部の人友は年に2、3回は会つて旧交を温めて

いる。しかし、理学部や政治学部、経済学部など、圧倒的に男性の多い学校なのだ。他の学部の友人と会う機会はほとんど、いや全くなかつた。記憶もまばらである。いまさら会つたところで、共通の話題などないだろうし、60年前の顔がよみがえつたとしても現在は変貌しているほうが多いだろう。出席すること自体が無意味ではないかと思える。

卒業時の学生は600名だったとのことだが、今回の出席者は70名。すでに逝去している人、体の不具合な人、家族に病人のいる人など、欠席の理由は様々である。60年目の同期会に出席できること自体が幸せなのかもしれない。

70人もの高齢者の、灰色の集団を眺めると、もちろん私もその中の一人なのだが、改めて自分が直面している年齢を深刻に考えざるを得なかつた。豪華に輝いている二つのシャンデリア、大きな牡丹模様の淡いピンクの壁、この部屋はどうやら結婚式の披露宴の場所に使われるのが多いような華やかさだ。我々灰色の集団はなおさら対照的に沈んでみえてしまう。私たちは学科ごとに10人ほどで円卓を囲んだ。型通りの学長の挨拶、同窓会長のあいさつ、大学の後輩であるというTホテル社長の挨拶等々、延々と続く決まり文句。

まことに形式的な挨拶は短いほうが好ましい。同じテーブルの顔なじみの友人と近況を話し合い、ほとんど聞いてはいない。

あちこちから聞こえてくるささやき声で私たちだけでないことがよくわかった。やがてバイキングの食事、この会費でこの料理かとおもわないではないが、ホテルは心地よい場所と、行き届いたサービスが売り物なのだ。実質的な料理のお粗末さに落胆してはいけない。お皿を持ってうろうろする。ビールやワインにほろ酔い加減になって宴はたけなわになり、有志が壇上に上がって自己紹介が始まり、自分の来し方を演説し始めた。大方は自分の出世物語である。いかに苦労をして一流企業のトップクラスになったかを何人かの人たちがまくしたてる。これもあまり興味のある話題ではない。他人の自慢話など関心がないのだ。私たちのグループを代表して、卒業後、ほとんど海外生活をしてきたという男性が、自身の海外経験を話した。オランダでの暮らしが長かったというが、国を代表するチューリップの季節を除けば、天候は陰鬱であり快適な暮らしではなかったという。ロンドンもしかり、観光と現実的な暮らしは全く別であることを知った。私たちの会が終わった後にこの会場で大きなイベントがある

とかで、そうそうに解散となった。

実は、私はほのかな期待をもって、同期会に参加したのであった。日々の生活に追われて学生時代のことにはるか彼方にかすんでしまっていたが、久しぶりに思いを巡らす機会になった。

私は昭和20年、終戦後の学制改革の混乱をもろに経験した年代である。私が生まれ育った地方の小都市でもそれは同じであった。戦勝国アメリカの方針である男女共学という画期的な学制改革で、戦前の旧制中学と旧制女学校が合併し、新制高校になり、私たちはその第一期生であり、当時の県の教育委員会の方針で、生徒本人の意志とは関係なく、旧制女学校の校舎に男女共学として入学したのであった。

女学校時代、県内でもトップの進学校だったが、女高の校舎は男子生徒にとつて設備もろくになく、いろいろな面で不利であったと思う。先輩は女子ばかり。憤懣やるかたない男子生徒はことあるごとに戦前の女学校の封建的な校風に反発した。授業をポイコットしたり、化石のように十年一日のような古典の授業を繰り返す教師を糾弾した。15、6歳の生徒にとつて精神的に半数いる私

たち女子生徒も彼らに同調した。何十年も戦前の女子教育にかかわって良妻賢母を説いてきた校風とでもいふべき方針を、戦後の教育転換で突然変えることは教師にとっても大変な事だったのだ。しかし、私たちにあって、それは「理由ある反抗」であり、おおげさに言えば、時代の変革による犠牲者だという悲壮な気持ちに発展していった。

時代は、共産党から除名された左翼ブントが全学連を握り、全国的に学生運動の波が広がっていった。私たちの高校も例外ではなかった。男子生徒と同等に抵抗の先頭に立っていたので、私の両親は学校から呼び出され、注意されることがしばしばだったという。もちろん私に思想的に一貫したものはなかった。ただ、思春期特有のエネルギーの発散をしただけに過ぎない。私の中からマグマのように湧いてくる反抗の嵐を自分で抑えることができずに行動しただけだ。特に過激なグループに入って行動に走る私を心配した両親は、最も穏便な大学への進学なら、という理由で私は新制大学のG校を受験し、文学部仏文科に入学することになったのである。田舎の高校でフランス語など触れたこともなかったが、「国文学なんてせまい、文學をやるならフランスだよ。世界に冠たるフランス文学をやる

べきだ」という担任の教師のアドバイスに背中を押されたのだ。

地方から上京してきた女子学生の私の学生生活は、たいていの人がそうであるように、自由で充実していた。いまになって反省すべきことは、せっかくの恵まれた環境だったのだから、もっと勉強をするべきだったと忸怩たる思いがあるが、それもまた私だけではないようだ。友人たちもみな同じことを後悔していて、話題はいつも「あの時……」ということである。

しかし青春と呼ぶにふさわしい「輝ける日々」であったことは確かである。当時流行していた「純喫茶」にたむろして、何時間も文学論議を交わしたし、私は、クラブは「社会科学研究会」といういかめしい会に入会した。これも高校時代に行動を共にして、それぞれの大学に進学した男子学生の友人の真似をしたに過ぎない。

中には大学時代に共産党に入党し、初志貫徹、現在も党员として活躍している友人もいる。私は何を学んだのか、まったく記憶にない。所詮私にとって左翼運動は単に表面をかすっただけのことだった。両親が心配するほどのことではなかったし、私の本質はほかのところにあった。しかし一度その時代の「風」を経験

してしまった私にとって、まるで白紙ということはなく、60年、70年の安保闘争は他人ごととは思えず、全共闘運動による東大安田講堂の落城をテレビで見ても涙したのだが。

薄暗い部活の部屋で、私は男子学生がマージャンに熱中しているのを傍でみていて自然に覚えた。途中で口出しをして嫌われていたが、やがて仲間に入れてもらえるようになり、卒業するころには一人前の腕前になっていた。これは享樂的な私の性格にぴったりのゲームで、社会人になってからも、京橋一帯に点在する雀荘で、たばこの煙にまみれ、退廃を絵に描いたような雰圍気のなかで、夜更けまで遊ぶことがしばしばあり、私のマージャン人生に深くかかわることになる。結局「社会科学研究所会」で私が身につけた最大のものはマージャンだったような気がする。これも悔恨の一つではある。

クラブで一緒だった同級生の経済学部の彼は、のっぽで大柄なのに、笑うと、頬にえくぼができた。一緒に同じ教室で講義をうけていたのだが、もちろん特にひかれあってきたわけではなかった。合宿で海辺の宿に泊まったこともあるが、砂浜をわいわい駆け回って

反戦歌を歌ったり、大勢の仲間達と一緒にであった。彼はのんびりと、穏やかな性格で皆から好かれ、リーダー的存在であった。

深い霧のなかの墨絵のように一つの映像が鮮やかに浮かんでくる。会場はどこだったのか、季節はいつだったのか、薄明の中の出来事だ。私と彼は諏訪根自子のバイオリンリサイタルを聴きに行ったのだった。戦前から戦後にかけて、諏訪根自子は美貌の天才ヴァイオリニストとして名声を博していた。華やかな経歴の持ち主だったが、1960年ごろから公の場であまり演奏しなくなっていたので、1957、8年ごろはリサイタルを聴くことは難しかったと思えるのだが、なぜか私たちは二人でその機会を得た。彼が誘ってくれたのだと思う。諏訪根自子はバッハの「無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータ」がことに有名であり、おそらくその夜も演奏したのだと思う。アンコールに答えて彼女が演奏した曲がサラサーテの「チゴインエルワイゼン」だった。「ジブシーの旋律」という、悲劇的で哀愁にみち、かつ奔放な、まさにジブシーの嘆きを歌っているようなドラマチックな曲を初めて聴いて衝撃を受けた。音楽とはこんなにも胸に響き、心をかき乱すのか、私は言葉を失った。周りのすべてが

消えて曲だけがいつまでもこだました。——。私の大事なな想い出として心の奥深くに包み込まれていった。その場の景色となった彼とともに。

閉会の挨拶があつて、帰り支度をしていたときに、背後で気配がした。振り向いた。すぐそばに背の高い、少なくとも頭髪をきれいに撫でつけた小太りの男性が立っている。お互いにまじまじと見つめあつた。

「○○さんですか」と彼は私の旧姓を呼んだ。「そうですけど」と答えてはつとした。人のよさそうな笑顔をみせたときにくつきりとえくぼが浮かんだのだ。

「ああ、○○さんですね」私はすぐに気づいて彼の名前を言った。実はこの邂逅を期待して私は会に出席したのであつた。期待は目の前にあつた。

「xxxxxx」彼はしきりになにか言っている。聞きかえすのも失礼とおもひ懸命に耳を傾ける。しかし発音がはつきりしない。どうも入れ歯がよくあつていないようだ。口はもぐもぐ動くのだが意味があまり通じないのだ。仕方なく私は無意味な笑顔を浮かべて深々と頭をさげた。「お目にかかれてうれしうございました」。

彼の返事は定かでなかった。

\* \* \*

月刊文芸春秋7月号に、93歳の作家外山滋比古と、88歳の第一生命財団顧問加藤恭子の次のようなタイプの対談が乗っていた。

「90歳？年齢なんか忘れなさい」。日本人は欧米と違って年齢によつて人間を序列化する傾向があるという。これは整理法の一つで、人間の能力や容姿などで順番を決めると人によつて基準が違うから誤解が起りやすい、年齢を使えば簡単に序列化できるとのこと。しかし、年齢を気にするあまり自分の最後までありうる可能性を狭めてはいけないという事だった。たしかに年齢の枠を自分にはめて萎縮する必要はないと思う。何より周りが決めつけるほど本人は意識してはいないのだから。

(2017年 6月)